

実務経験のある教員による授業科目一覧

科目名	単位数	学年	職名	担当教員名	勤務先（業種）	講義内容（その経験を生かして、どのような教育を行なうのか。）
医療の担い手としてのこころ構えA	1.5	1	教授	矢野 義孝	製薬会社（研究・開発部門）	製薬会社での臨床開発における薬物動態評価や薬効評価等について、1年生を対象に薬学で学ぶ学問が医薬品の開発にどのように役立つのかを平易に説明する
解剖学	1.5	1	准教授	中田 晋	病院（医師）	医師としての病院勤務臨床経験を生かし、臨床実地において薬学的に重要な解剖学的事項ならびに悪性腫瘍薬物療法学の発展に貢献する薬剤師を育成する教育を行う。
生命科学	1.5	1	教授	長澤 一樹	大学病院（薬剤師）	遺伝子変異、薬物動態、栄養管理、チーム医療などについてのエピソードを基に薬剤師としてのそれらの知識・技能・態度の重要性などの教育
生理学A	1.5	1	教授	芦原 英司	病院（医師）	ヒトの身体の正常機能の説明に合わせ、異常を来した病態の解説および薬物治療の実際を話し、薬剤師の医療チームへの関わり方、およびそのための生体構造機能の理解の重要性を伝え、統合的にヒトの身体機能を理解させるようにしている。
早期体験学習	1.5	1	講師	中村 暢彦	医療機関（病院薬剤師）	当該教員は、医療機関における実務経験・知識・技術を活かし、薬剤師業務および疾患・臓器別の薬物療法について学生へ教授する。具体例としては、肺がん薬物療法に対する抗がん薬の取扱い、効果・副作用評価、副作用対策、患者や家族への生活における注意事項など薬物療法の基本的事項を教授する。
体育実技	1.0	1	准教授	長澤 吉則	施設管理会社 （スポーツ指導員）	施設管理会社では、運動・スポーツを行うにあたって、子供から高齢者までを対象に安全かつ有効なプログラムの実践を目的として各種スポーツ指導法等を検討している。当該教員は施設管理会社における実務経験を活かし、医療従事者を目指す学生に、生涯にわたる運動・スポーツの実践の基礎とともに、運動生理学的基礎知識を教授する。
健康科学	1.5	1	准教授	長澤 吉則	施設管理会社 （スポーツ指導員）	施設管理会社では、運動・スポーツを行うにあたって、子供から高齢者までを対象に安全かつ有効なプログラムの実践を目的として各種スポーツ指導法等を検討している。当該教員は施設管理会社における実務経験を活かし、医療従事者を目指す学生に、生涯にわたる運動・スポーツの実践の基礎とともに、運動生理学的基礎知識を教授する。
医療の担い手としてのこころ構えB	1.5	2	講師	今西 孝至	病院（薬剤師）	病院薬剤師の大きな役割は、病棟に常駐して、医師や看護師などと病棟におけるチーム医療を実践し、病棟での薬物療法の質を向上させることである。当該教員は、病院薬剤師としての実務経験を活かし、医薬品の適正使用だけではなく、リスクマネジメントや認定・専門薬剤師の役割など、高度な専門性を必要とする医療機関での病院薬剤師の役割や必要性について教授する。
					調剤薬局（薬剤師）	薬局薬剤師の大きな役割は、患者だけではなく、一般市民も含めた地域住民を対象にした地域医療が主な役割である。当該教員は、薬局薬剤師としての実務経験を活かし、医療用医薬品だけではなく、OTC薬やサプリメント、また健康相談や運動指導等の健康サポートも視野に入れた幅広い医療をどのように地域住民に対して提供していくかについて教授する。
			講師	松村 千佳子	病院（薬剤師）	薬剤師が患者を中心としたチーム医療を行うには医療従事者・患者との良好なコミュニケーションが必要である。病院薬剤師としての経験をもとに医療従事者・患者に信頼される薬剤師になるために必要な心構えについて、実体験を交えながら解説し学生の医療人としての倫理感を高める。
感染症学	1.5	2	教授	小田 真隆	病院（薬剤師）	病院（2施設）での感染症治療の具体例や抗菌薬の使用状況を説明し、現在の医療が抱える問題点について教授する。
			教授	村木 優一	大学病院（薬剤師）	当該教員は、感染制御専門薬剤師、抗菌化学療法認定薬剤師であり、大学病院でほとんどの部署および主に外科病棟の経験を有している。症例や自験例を通じて学生が学ぶ知識を現場でどう活かすのかを教授している。

科目名	単位数	学年	職名	担当教員名	勤務先（業種）	講義内容（その経験を生かして、どのような教育を行なうのか。）
生体分析化学	1.5	2	教授	安井 裕之	医療機関（病院薬剤師）	医薬品による疾患治療の臨床現場で、実際の患者カルテから臨床検査値を読み取り、投薬の際に疾患・検査値・治療薬との関係性を考慮する大切さや、複数の薬の飲み合わせによる相互作用が検査値や健康状態に影響する可能性を、分析化学による測定法の確からしさも十分に配慮した上で考察できる薬剤師になる必要性を、現場で得た経験と証拠を交えて講義に活かしている。
免疫学	1.5	2	助教	渡部 匡史	病院（薬剤師）	病院薬剤師では、抗がん剤無菌調整やレジメン管理などの業務に携わっていた。当該教員はその医療現場における実務経験をもとに、現在臨床で汎用されている抗体医薬を理解するうえで必要な基礎知識およびその重要性について教授する。
薬物動態学	1.5	2	教授	栄田 敏之	製薬会社（研究）	製薬会社では、リード化合物の最適化を行うにあたって、ヒトにおける有効性、安全性の担保等を目的として、実験動物における体内動態を検討している。当該教員は製薬会社における実務経験を活かし、創薬への従事を目指す学生に、創薬の手順とともに、薬物動態学的情報の利活用の方法を教授する。
					大学病院（薬剤師）	添付文書に記された用法・用量を遵守しても、治療効果が不十分な患者も、重篤な副作用が発現する患者も存在する。患者個々に用法・用量を調整することが必要不可欠であるが、その基礎となるのが薬物動態学的情報である。当該教員は医療現場における実務経験を活かし、医療現場における従事を目指す学生に、患者背景と薬物動態の関係とともに、薬物動態学的情報の利活用の方法を教授する。
有機化学C	1.5	2	助教	浜田 翔平	製薬会社（研究）	多くの医薬品に含まれる構造である芳香環の反応性を教授する。
有機化学実習	1.0	2	助手	千原 佳子	製薬会社（研究）	創薬において必要となる基本的な有機合成の手技や機器の原理、使用方法を指導する。
栄養化学	1.5	2	教授	長澤 一樹	医療機関（病院薬剤師）	遺伝子変異、薬物動態、栄養管理、チーム医療などについてのエピソードを基に薬剤師としてのそれらの知識・技能・態度の重要性などの教育
解剖学・生理学実習	0.5	2	助教	鳥羽 裕恵	調剤薬局（薬剤師）	解剖、生理、病態を知ることが将来薬剤師として調剤、服薬指導、適切な医薬品の使用、患者の健康管理、合併症の予防の上で必須の知識である。実習、病態診断学A、分子病態学特論1の中では、学んでいる内容をどのように臨床の現場に生かすことができるかを伝えながら講義を進めることで、学生の自分自身の将来像を描きながら、講義と現場をリンクさせながら学ぶ教育が実施できる。
機器分析学実習	0.5	2	助手	千原 佳子	製薬会社（研究）	創薬において必要となる基本的な有機合成の手技や機器の原理、使用方法を指導する。
生理学B	1.5	2	教授	芦原 英司	病院（医師）	ヒトの身体の正常機能の説明に合わせ、異常を来した病態の解説および薬物治療の実際を話し、薬剤師の医療チームへの関わり方、およびそのための生体構造機能の理解の重要性を伝え、統合的にヒトの身体機能を理解させるようにしている。
公衆衛生学B	1.5	3	教授	渡辺 徹志	静岡県（技師）	廃棄物の種類、廃棄物の処理に関する法律、制度などを講義する。当該教員は地方自治体の担当官として指導にあっていた経験を活かし、産業廃棄物の管理における行政の役割を教授する。
腫瘍細胞生物学	1.5	3	准教授	中田 晋	研究所（研究）	多数の分子標的治療薬やゲノム医療が臨床応用される現代の臨床腫瘍学を深く理解するために必要な基礎科学の内容について分子生物学的解析及び病理学的研究の実務経験を生かした教育を行う。
テーラーメイド薬物治療学	1.5	3	教授	栄田 敏之	大学病院（薬剤師）	添付文書に記された用法・用量を遵守しても、治療効果が不十分な患者も、重篤な副作用が発現する患者も存在する。患者個々に用法・用量を調整することが必要不可欠であるが、その基礎となるのが薬物動態学的情報である。当該教員は医療現場における実務経験を活かし、医療現場における従事を目指す学生に、患者背景と薬物動態の関係とともに、薬物動態学的情報の利活用の方法を教授する。
			教授	西口 工司	大学病院（薬剤師）	臨床現場の薬剤師として患者や患者の薬物治療に対応した経験をもとに、個々の患者の特性に応じた調剤や薬物治療の必要性および重要性について教授する。
			助教	峯垣 哲也	病院（薬剤師）	病院では、調剤業務をはじめ製剤、輸液の調製、病棟業務など幅広く病院薬剤師業務を行ってきた。当該教員は、このような実務経験から得た情報を講義内容に多く盛り込み、医療現場をイメージしやすいような工夫を行っている。

科目名	単位数	学年	職名	担当教員名	勤務先（業種）	講義内容（その経験を生かして、どのような教育を行なうのか。）
天然医薬品学B	1.5	3	助教	中嶋 聡一	企業（基礎研究・開発）	原料に関する基礎研究や商品開発の経験、および原料会社・OEM製造会社などのやり取りで得られた知識・経験を基に、実際の漢方薬や食品などの商品開発現場で生薬や植物原料を利用する際の情報や注意点を紹介し、教科書や参考書の知識を活かす将来の仕事のイメージも併せて提供する。
病態診断学 A	1.5	3	教授	中田 徹男	病院（医師）	診断学・薬物治療学の実践について患者さんとのコミュニケーションの方法を含めて伝える。
			准教授	小原 幸	病院（医師）	患者診療経験より、具体例を挙げて、薬物療法の効果、副作用などの解説を行っています。
			助教	鳥羽 裕恵	調剤薬局（薬剤師）	解剖、生理、病態を知ることは将来薬剤師として調剤、服薬指導、適切な医薬品の使用、患者の健康管理、合併症の予防の上で必須の知識である。実習、病態診断学A、分子病態学特論1の中では、学んでいる内容をどのように臨床の現場に生かすことができるかを伝えながら講義を進めることで、学生の自分自身の将来像を描きながら、講義と現場をリンクさせながら学ぶ教育が実施できる。
放射薬学	1.5	3	准教授	河嶋 秀和	大学病院 （放射線診断科）	現在の実臨床では放射線による診断や治療が不可欠であり、その中でも放射性医薬品を用いた領域は「核医学」と称され広く活用されている。特に薬学においてはSPECT（単光子放射型コンピュータ断層撮影）やPET（陽電子放射型断層撮影）といった核医学診断、あるいは主にがんを対象とした核医学治療に用いられる放射性医薬品に関する知識が必要となる。当該教員は大学病院での実務経験を活かし、医療現場に従事することを旨とする学生に対して放射性医薬品の製造、供給体制から患者投与後の集積・作用機序に至るまでを網羅的に教授する。
薬品合成化学A	1.5	3	准教授	小島 直人	研究所（研究）	製薬会社では、新薬の創製研究において、様々な有機合成反応を駆使して、目的の有機化合物を合成している。当該教員は、研究所での創製研究の経験を活かし、製薬会社での研究職や生産技術職を目指す学生に、有機合成化学の創製の現場での利活用の方法を教授する。
薬品合成化学B	1.5	3	准教授	小島 直人	研究所（研究）	製薬会社では、新薬の創製研究において、様々な有機合成反応を駆使して、目的の有機化合物を合成している。当該教員は、研究所での創製研究の経験を活かし、製薬会社での研究職や生産技術職を目指す学生に、有機合成化学の創製の現場での利活用の方法を教授する。
			助教	岩崎 宏樹	製薬会社 （研究・プロセス開発）	製薬会社では、原薬の合成のみならず医薬部外品、化粧品の有効成分の合成、およびそのプロセス開発の研究に従事していた。当該教員は製薬会社における実務経験を活かし、有機化学的観点から医薬品の合成における重要なポイントや実際に医薬品とするに必要な工夫など創製に関して興味を持つような講義を行う。
臨床統計開発論	1.5	3	教授	矢野 義孝	製薬会社 （研究・開発部門）	臨床統計解析手法、および医薬品開発の流れと臨床統計評価との関連性を系統的に説明する
感染症治療学	1.5	3	教授	小田 真隆	病院（薬剤師）	病院（2施設）での感染症治療の具体例や抗菌薬の使用状況を説明し、現在の医療が抱える問題点について教授する。
			教授	村木 優一	大学病院（薬剤師）	当該教員は、感染制御専門薬剤師、抗菌化学療法認定薬剤師であり、大学病院でほとんどの部署および主に外科病棟の経験を有している。症例や自験例を通じて学生が学ぶ知識を現場でどう活かすのかを教授している。
薬理学実習	1.0	3	助教	鳥羽 裕恵	調剤薬局（薬剤師）	解剖、生理、病態を知ることは将来薬剤師として調剤、服薬指導、適切な医薬品の使用、患者の健康管理、合併症の予防の上で必須の知識である。実習、病態診断学A、分子病態学特論1の中では、学んでいる内容をどのように臨床の現場に生かすことができるかを伝えながら講義を進めることで、学生の自分自身の将来像を描きながら、講義と現場をリンクさせながら学ぶ教育が実施できる。

科目名	単位数	学年	職名	担当教員名	勤務先（業種）	講義内容（その経験を生かして、どのような教育を行なうのか。）
がん化学療法学	1.5	4	准教授	中田 晋	病院（医師）	医師としての病院勤務臨床経験を生かし、臨床実地において薬学的に重要な解剖学的事項ならびに悪性腫瘍薬物療法学の発展に貢献する薬剤師を育成する教育を行う。
			講師	中村 暢彦	医療機関（病院薬剤師）	当該教員は、医療機関における実務経験・知識・技術を活かし、薬剤師業務および疾患・臓器別の薬物療法について学生へ教授する。具体例としては、肺がん薬物療法に対する抗がん薬の取扱い、効果・副作用評価、副作用対策、患者や家族への生活における注意事項など薬物療法の基本的事項を教授する。
地域医療学A	1.5	4	教授	楠本 正明	調剤薬局（薬剤師）	病院、薬局勤務の実務経験から、医薬分業の意義と先人の努力を示し、病院同様薬局薬剤師も医薬品適正使用を基本とした薬学的管理内容を教授する。また、在宅医療で患者個々に対する薬物療法を実務経験をもとに、広い視点から教授する。
地域医療学B	1.5	4	教授	楠本 正明	調剤薬局（薬剤師）	医薬品の市場、流通の仕組みと後発医薬品について、実務経験から課題と解決を教授する。特に、選定、臨床評価、副作用等についてその実際を示すと共に、患者への説明方法も加え教授する。
病態診断学B	1.5	4	教授	中田 徹男	病院（医師）	診断学・薬物治療学の実践について患者さんとのコミュニケーションの方法を含めて伝える。
			准教授	小原 幸	病院（医師）	患者診療経験より、具体例を挙げて、薬物療法の効果、副作用などの解説を行っています。
臨床情報学	1.5	4	教授	橋詰 勉	大学病院（薬剤師）	医療現場における薬学管理のためには、患者情報を患者や家族、医師・看護師などの医療従事者、診療録などから収集し、患者の状態を把握・判断することが必要である。また、その過程を記録することも重要である。当該教員は医療現場での業務経験に基づき、これらの実践的手法について学生に伝える。
			准教授	津島 美幸	大学病院（薬剤師）	実務経験を生かして、医療現場で行われている医薬品に関する情報収集、情報提供についての教育を心掛けている。
医療薬学A	1.5	4	教授	楠本 正明	医療機関（病院薬剤師）	病院では、病棟業務（薬剤管理指導業務）の構築を行うにあたり、医薬品適正使用の実践を目的に、薬学的介入を評価してきた。講義では、病棟業務の必要性を理解するとともに、具体的にはポリファーマシー対策や臨床研究の実例を示し、サイエンスとしての臨床薬学を教授する。また、病院薬剤師を目指す学生も多いので、臨床における薬剤師の姿勢も教授する。
			講師	中村 暢彦	医療機関（病院薬剤師）	当該教員は、医療機関における実務経験・知識・技術を活かし、薬剤師業務および疾患・臓器別の薬物療法について学生へ教授する。具体例としては、肺がん薬物療法に対する抗がん薬の取扱い、効果・副作用評価、副作用対策、患者や家族への生活における注意事項など薬物療法の基本的事項を教授する。
			講師	今西 孝至	病院（薬剤師）	病院薬剤師の大きな役割は、病棟に常駐して、医師や看護師などと病棟におけるチーム医療を実践し、病棟での薬物療法の質を向上させることである。当該教員は、病院薬剤師としての実務経験を活かし、医薬品の適正使用だけではなく、リスクマネジメントや認定・専門薬剤師の役割など、高度な専門性を必要とする医療機関での病院薬剤師の役割や必要性について教授する。
					調剤薬局（薬剤師）	薬局薬剤師の大きな役割は、患者だけではなく、一般市民も含めた地域住民を対象にした地域医療が主な役割である。当該教員は、薬局薬剤師としての実務経験を活かし、医療用医薬品だけではなく、OTC薬やサプリメント、また健康相談や運動指導等の健康サポートも視野に入れた幅広い医療をどのように地域住民に対して提供していくかについて教授する。
講師	松村 千佳子	病院（薬剤師）	病院薬剤師の実務経験をもとに、調剤や薬学的管理といった薬剤師業務全般に関する知識を指導す			

科目名	単位数	学年	職名	担当教員名	勤務先（業種）	講義内容（その経験を生かして、どのような教育を行なうのか。）
医療薬学B	1.5	4	教授	楠本 正明	医療機関（病院薬剤師）	実際に症例を示し、その病態と薬物療法をSGDで検討する。基礎薬学で学んだ知識を臨床で活用する方法を医薬品添付文書を基に教授する。具体的には、禁忌症、用法用量、相互作用、副作用、薬物動態等を考慮し高齢者症例で検討する。また、薬剤変更が必要な場合、その薬剤選定方法と変更後の確認を教授する。
			講師	中村 暢彦	医療機関（病院薬剤師）	当該教員は、医療機関における実務経験・知識・技術を活かし、薬剤師業務および疾患・臓器別の薬物療法について学生へ教授する。具体例としては、肺がん薬物療法に対する抗がん薬の取扱い、効果・副作用評価、副作用対策、患者や家族への生活における注意事項など薬物療法の基本的事項を教授する。
			講師	今西 孝至	病院（薬剤師）	病院薬剤師の大きな役割は、病棟に常駐して、医師や看護師などと病棟におけるチーム医療を実践し、病棟での薬物療法の質を向上させることである。当該教員は、病院薬剤師としての実務経験を活かし、医薬品の適正使用だけでなく、リスクマネジメントや認定・専門薬剤師の役割など、高度な専門性を必要とする医療機関での病院薬剤師の役割や必要性について教授する。
					調剤薬局（薬剤師）	薬局薬剤師の大きな役割は、患者だけではなく、一般市民も含めた地域住民を対象にした地域医療が主な役割である。当該教員は、薬局薬剤師としての実務経験を活かし、医療用医薬品だけではなく、OTC薬やサプリメント、また健康相談や運動指導等の健康サポートも視野に入れた幅広い医療をどのように地域住民に対して提供していくかについて教授する。
講師	松村 千佳子	病院（薬剤師）	病院薬剤師の実務経験をもとに、調剤や薬学的管理といった薬剤師業務全般に関する知識を指導する。調剤関連だけでなく多職種との連携や患者およびその家族への薬学的支援のあり方についても触れる。			
実務事前実習	4.0	4	教授	村木 優一	大学病院（薬剤師）	当該教員は、感染制御専門薬剤師、抗菌化学療法認定薬剤師であり、大学病院でほとんどの部署および主に外科病棟の経験を有している。症例や自験例を通じて学生が学ぶ知識を現場でどう活かすのかを教授している。
			教授	橋詰 勉	大学病院（薬剤師）	医療現場における薬学管理のためには、患者情報を患者や家族、医師・看護師などの医療従事者、診療録などから収集し、患者の状態を把握・判断することが必要である。また、その過程を記録することも重要である。当該教員は医療現場での業務経験に基づき、これらの実践的手法について学生に伝える。
			准教授	津島 美幸	大学病院（薬剤師）	実務経験を生かして、医療現場で行われている医薬品に関する情報収集、情報提供についての教育を心掛けている。
			講師	中村 暢彦	医療機関（病院薬剤師）	当該教員は、医療機関における実務経験・知識・技術を活かし、薬剤師業務および疾患・臓器別の薬物療法について学生へ教授する。具体例としては、肺がん薬物療法に対する抗がん薬の取扱い、効果・副作用評価、副作用対策、患者や家族への生活における注意事項など薬物療法の基本的事項を教授する。
調剤学	1.5	4	教授	西口 工司	大学病院（薬剤師）	臨床現場の薬剤師として患者や患者の薬物治療に対応した経験をもとに、個々の患者の特性に応じた調剤や薬物治療の必要性および重要性について教授する。
			助教	峯垣 哲也	病院（薬剤師）	病院では、調剤業務をはじめ製剤、輸液の調製、病棟業務など幅広く病院薬剤師業務を行ってきた。当該教員は、このような実務経験から得た情報を講義内容に多く盛り込み、医療現場をイメージしやすいような工夫を行っている。
薬学総合演習	3.0	4	教授	芦原 英司	病院（医師）	ヒトの身体の正常機能の説明に合わせ、異常を来した病態の解説および薬物治療の実際を話し、薬剤師の医療チームへの関わり方、およびそのための生体構造機能の理解の重要性を伝え、統合的にヒトの身体機能を理解させるようにしている。

科目名	単位数	学年	職名	担当教員名	勤務先（業種）	講義内容（その経験を生かして、どのような教育を行なうのか。）
PK-PD 解析概論	1.0	6	教授	栄田 敏之	製薬会社（研究）	製薬会社では、リード化合物の最適化を行うにあたって、ヒトにおける有効性、安全性の担保等を目的として、実験動物における体内動態を検討している。当該教員は製薬会社における実務経験を活かし、創薬への従事を目指す学生に、創薬の手順とともに、薬物動態学的情報の利活用の方法を教授する。
			教授	安井 裕之	医療機関（病院薬剤師）	医薬品による疾患治療の臨床現場で、実際の患者カルテから臨床検査値を読み取り、投薬の際に疾患・検査値・治療薬との関係性を考慮する大切さや、複数の薬の飲み合わせによる相互作用が検査値や健康状態に影響する可能性を、分析化学による測定法の確からしさも十分に配慮した上で考察できる薬剤師になる必要性を、現場で得た経験と証拠を交えて講義に活かしている。
アドバンスト薬学	10.0	6	教授	芦原 英司	病院（医師）	ヒトの身体の正常機能の説明に合わせ、異常を来した病態の解説および薬物治療の実際を話し、薬剤師の医療チームへの関わり方、およびそのための生体構造機能の理解の重要性を伝え、統合的にヒトの身体機能を理解させるようにしている。
実践医薬開発概論	1.0	6	教授	矢野 義孝	製薬会社 （研究・開発部門）	製薬会社での臨床開発における薬物動態評価や薬効評価等について、臨床統計学と関連づけながら説明する
地域医療連携概論	1.0	6	教授	楠本 正明	調剤薬局（薬剤師）	2025年日本は経験したことのないスーパー高齢者列島になる。薬剤師の役割も地域の中で大きく変わり、地域包括ケアシステムにより多職種連携が必要となる。連携を進めるには薬局単独では難しく、地域薬剤師会の活動が重要となる。薬剤師会で活動をしていた経験から、地域医療を支える多職種連携の進め方、在宅チーム医療の作り方等を実例を示し教授する。
			講師	今西 孝至	調剤薬局（薬剤師）	薬局薬剤師の大きな役割は、患者だけではなく、一般市民も含めた地域住民を対象にした地域医療が主な役割である。当該教員は、薬局薬剤師としての実務経験を活かし、医療用医薬品だけではなく、OTC薬やサプリメント、また健康相談や運動指導等の健康サポートも視野に入れた幅広い医療をどのように地域住民に対して提供していくかについて教授する。
分子病態学概論A	1.0	6	教授	中田 徹男	病院（医師）	診断学・薬物治療学の実際、新しいガイドラインに沿った治療・処方計画を講義、卒業研究指導を行う。
医薬品レギュラトリーサイエンス概論	1.0	6	教授	矢野 義孝	製薬会社 （研究・開発部門）	医薬品の開発に必要な規制等に関して、学外講師とともにSGDの場を設け、新薬開発におけるレギュラトリーサイエンスの必要性について討論する
栄養管理概論	1.0	6	教授	長澤 一樹	病院（薬剤師）	遺伝子変異、薬物動態、栄養管理、チーム医療などについてのエピソードを基に薬剤師としてのそれらの知識・技能・態度の重要性などの教育
感染制御概論	1.0	6	教授	村木 優一	大学病院（薬剤師）	当該教員は、感染制御専門薬剤師、抗菌化学療法認定薬剤師であり、大学病院でほとんどの部署および主に外科病棟の経験を有している。症例や自験例を通じて学生が学ぶ知識を現場でどう活かすのかを教授している。
緩和医療概論	1.0	6	講師	中村 暢彦	医療機関（病院薬剤師）	当該教員は、医療機関における実務経験・知識・技術を活かし、薬剤師業務および疾患・臓器別の薬物療法について学生へ教授する。具体例としては、肺がん薬物療法に対する抗がん薬の取扱い、効果・副作用評価、副作用対策、患者や家族への生活における注意事項など薬物療法の基本的事項を教授する。
			講師	松村 千佳子	病院（薬剤師）	病院薬剤師として特に緩和医療を専門として関与してきた経験をもとに、緩和医療概論では薬剤師を目指す学生に緩和医療の具体的事例を交えながら薬剤師に求められる緩和医療関連業務の実際、患者や家族へのケアのあり方を解説する。また臨床薬学概論では緩和領域における薬剤師の考える臨床研究テーマ設定の具体例について解説する。

科目名	単位数	学年	職名	担当教員名	勤務先（業種）	講義内容（その経験を生かして、どのような教育を行なうのか。）
先端臨床薬学概論	1.0	6	教授	西口 工司	大学病院（薬剤師）	臨床現場の薬剤師として患者や患者の薬物治療に対応した経験をもとに、個々の患者の特性に応じた調剤や薬物治療の必要性および重要性について教授する。
			講師	松村 千佳子	病院（薬剤師）	病院薬剤師として特に緩和医療を専門として関与してきた経験をもとに、緩和医療概論では薬剤師を目指す学生に緩和医療の具体的事例を交えながら薬剤師に求められる緩和医療関連業務の実際、患者や家族へのケアのあり方を解説する。また臨床薬学概論では緩和領域における薬剤師の考える臨床研究テーマ設定の具体例について解説する。
			助教	峯垣 哲也	病院（薬剤師）	病院では、調剤業務をはじめ製剤、輸液の調製、病棟業務など幅広く病院薬剤師業務を行ってきた。当該教員は、このような実務経験から得た情報を講義内容に多く盛り込み、医療現場をイメージしやすいような工夫を行っている。
臨床腫瘍学概論	1.0	6	准教授	中田 晋	病院（医師）	医師としての病院勤務臨床経験を生かし、臨床実地において薬学的に重要な解剖学的事項ならびに悪性腫瘍薬物療法学の発展に貢献する薬剤師を育成する教育を行う。
			講師	中村 暢彦	医療機関（病院薬剤師）	当該教員は、医療機関における実務経験・知識・技術を活かし、薬剤師業務および疾患・臓器別の薬物療法について学生へ教授する。具体例としては、肺がん薬物療法に対する抗がん薬の取扱い、効果・副作用評価、副作用対策、患者や家族への生活における注意事項など薬物療法の基本的事項を教授する。

50科目

79.0 単位